

# 特別養護老人ホームにおける看取りケア効力感 の規定要因とその影響

—組織関連要因と QWL を中心に—

LI Shengnan

本研究は、特別養護老人ホーム(以下、特養)に勤務する介護職員を対象に、組織的要因(支援体制・研修環境・多職種連携など)に焦点を当て、介護職員の看取りケア効力感に影響を及ぼす要因を明らかにするとともに、看取りケア効力感が介護職員の QWL にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした。

日本においては、高齢化が進行する中、特養は高齢者の生活の場であると同時に、人生の最終段階を支える看取りの場としての役割を担っている。そのため、特養における介護職員には身体的ケアのみならず、利用者本人や家族の心理的側面に配慮した看取りケアに関わるスキルや能力が求められている。一方で、看取りケアは利用者の死に直面する実践であり、介護職員にとって精神的・情緒的負担が大きい業務であることが指摘されている。看取りケアに関わることに対して、不安や戸惑いを抱く介護職員も一定数存在している。そのような看取りケアに対する自信の欠如が介護職員の業務負担感の増大や就労継続意向の低下につながる可能性も考えられる。このような背景から、介護職員が看取りケアに対してどの程度の効力感を有しているのか、また、その効力感がどのような要因によって形成され、労働生活の質にどのように関係しているのかを検討することには、重要な研究課題である。

本研究では、近畿地方の特養に勤務する介護職員を対象に、郵送による無記名自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、看取りケアに対する認識、職場における支援体制および研修環境、看取りケア効力感、QWL などで構成した。配布した 1500 部のうち、有効な回答が得られた 185 名分(有効回答率 12.3%)のデータについて、記述統計分析、因子分析、相関分析、重回帰分析を行った。

分析の結果、各要因の因子構成については、組織的要因は「連携支援」と「研修教育」の二因子から構成され、看取りケア効力感は「心理的支援」と「身体的支援」の二因子から構成され

ることが確認された。組織的要因が看取りケア効力感に及ぼす影響を検討するために重回帰分析を行った結果、連携支援は看取りケア効力感の「心理的支援」と有意に関連しており、「身体的支援」とも有意に関連している。そのため、連携支援が円滑に行われているほど、看取りケア効力感が高いことが示された。このことから、医師・看護師との多職種連携や、上司・同僚に相談しやすい職場環境が、介護職員の看取りケアに対する自信の形成に重要な役割を果たしている可能性が示唆された。さらに、看取りケア効力感とQWLとの関係を検討した結果、看取りケア効力感はQWLと有意な正の関連を示していた。すなわち、看取りケアに対して一定の効力感を有する介護職員ほど、仕事に対する意欲や就労継続意向が高い傾向が認められる。

以上の結果から、特養における看取りケアを促進するためには、介護職員個人に依存するのではなく、連携支援と研修教育を柱とした組織的支援体制を構築し、看取りケア効力感を支える環境を整備することが重要であることが示唆された。本研究は、看取りケア効力感とQWLとの関連を実証的に示すことで、介護職員が安心して看取りケアに取り組める職場環境づくりに向けた基礎的知見を提供するものである。